

第3回ワールド・ベースボール・クラシックをキューバはどう戦うか。

去る11月16日と18日、第3回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)に向けて、キューバ代表と日本代表の強化親善試合が、ヤフー・ドームと札幌ドームで行われました。結果は、周知の通り、日本チームが、第1試合は2対0で、第2試合も3対1で連勝しました。日本にとっては、山本新監督のもとでの幸先良いスタートでした。しかし、現在、国際野球連盟(IBAF)ランキング第1位のキューバにとっては、屈辱の連敗だったかもしれません。ちなみに、IBAFランキングによれば、加盟72国中、2位は米国、3位日本、4位韓国となっています。



←ハバナの旧市街にあるホット・コーナー

キューバは、IBAFの29回の世界野球選手権で、これまで25回優勝しており、2006年の第1回WBCでは、決勝で日本に負け、第二位でした。これまでも、来日した選手の中には、160キロのスピードを誇った剛腕投手のブラウディリオ・ビネン、80年代大洋ホエールズ

が、フィデル・カストロに移籍を頼み断られた、スラッガーのアルマンド・カピロ、アグスティン・マルケッティ、全盛期を過ぎていたが、日本の中日ドラゴンズでプレーしたオマール・リナーレス、リナーレスとクリーンナップを組んだ、史上最強の強打陣のオレス・テス・キンデラン、アントニオ・パチェコなどの名選手は、世界的にも知られています。

ビネン投手→



キューバでは、近年、若い人びとの間でサッカー熱が盛り上がり、野球は、やはり第一の人気スポーツで、国技ともみなされています。現在、国内シリーズが戦われていますが、試合の翌日の新聞は、共産党の機関紙「グランマ」紙も、青年共産同盟の機関紙「フベントウ・レベルデ」紙も、大きく紙面を割いて報道しています。そして、職場でも、あるいは街頭でも、野球ファンは、前日の試合の結果を話題にします。キューバ人は、全員が監督といわれるほど、作戦、バッティング、ピッチング、フィールディングの細部を熱心に議論します。ハバナの旧市街のセントラル公園のホセ・マルティの像の南に「ホット・コーナー」と呼ばれる一角があり、熱烈な野球ファンが、まさに口角泡を飛ばして議論しています。

政府系のウェブサイト、「クーバ・デバート」には、世論調査の欄があります。そこでは、キューバは、次回のワールド・ベースボール・クラシックで、何位となるかが投票されて

います。それによると、4位以内が、34%、5位から8位が34%、一次ラウンド止まりが14%、優勝が13%、2位が5%と、かなり悲観的な評価となっています。確かに、現在、キューバの野球チームは、前に述べたような、傑出した好選手が少なくなってきました。その一つの理由は、90年代以降、一攫千金を夢見て、大リーグで活躍するため、違法ながら出国する選手が相継いでいるからです。ここ数年で350名以上の野球選手が違法に出国したといわれています。リバン・エルナンデス、チャップマンやセペーダは、バリバリの中心選手でした。現在、大リーグには次の19名のキューバ人がプレーしています。括弧内は、2012年度の成績です。

- Yonder Alonso(レッズ、一塁手、打率 278)
- Yuniesky Betancourt(ロイヤルズ、ショート、打率 266) **リバン・エルナンデス→**
- Francisley Bueno(ロイヤルズ、投手)
- Yoenis Cespedes(アスレチックス、センター、打率 292)
- Aroldis Chapman(レッズ、投手、11勝8敗)
- José Contreras(フィリーズ、投手)
- Yunel Escobar(ショート、ブルージェイズ、打率 282)
- Gio Gonzalez(ナショナルズ、投手) **チャップマン→**
- Yasmani Grandal(パドレス、捕手、打率 297)
- Adeiny Hechavarria(ブルージェイズ、内野手)
- Liván Hernández(ブリューワーズ、投手、通算 178勝 177負)
- Jose Iglesias(レッド・ソックス、ショート)
- Leonys Martin(レンジャーズ、外野手)
- Kendrys Morales(エンジェルス、一塁手、打率 281)
- Brayan Peña(ナープルズ、捕手)
- Alexei Ramirez(ホワイト・ソックス、ショート、打率 276)
- Eddy Rodriguez(パドレス、捕手)
- Gaby Sanchez(パイレーツ、一塁手) **セスペデス→**
- Raul Valdes(フィリーズ、投手)
- Dayan Viciedo(ホワイト・ソックス、左翼手)



いずれも、かなりの好成績を残しています。

2009年と2010年の2年間でキューバ出身大リーガーに支払われた金額は、7,000万ドル(70億円)を超えると報道されています。キューバ人の1か月の生活費がやや良い方で200ドル(年間2,400ドル)程度ですから、一人平均年額350万ドルの収入は、大変高額な収入となり、出国してキューバに家族送金をすればという誘惑に常に駆られることとなります。今回のWBC監督を務める闘将、ビクトル・メーサ監督は、8年間のキューバでの選手生活の

後、ポスティング制度を適用し、国が大リーグと交渉できるようにしてはどうかと提案していますが、今のところ、国内に反対意見もあり実現していません。これまでの出国経緯から、上記のキューバ人大リーガーがWBCで祖国のチームに入ることはできません。

キューバの新聞各紙は、11月の日本チームとの強化試合の結果を、中心選手の出国という問題のせいにはせず、真剣に対策を考えています。次回のWBCの投打の中心は、フレディ・アシエル・アルバレス（投手）とユリエスキイ・グリエル（三塁手）といわれていますが、チーム・プレーに重点が置かれているようです。11月下旬に開始された国内リーグでは、日本と同じミズノ200を使用しており、長打が著しく減っています。各紙の論評は、次の通りです。

「3月開催の4カ月前に調子がトップにあると思うのは時期尚早である。今回の目標は勝つことではなかった。今回の試合は、集団的な準備であり、勝負ではなかった。それは、センターのカスティージョに代えて、エンリケスを使ったこと、好投のアルバレスを交代させたことに見られる。ラインアップはこの時期に決めることではない。各試合のラインア

ップは適切であったが、どのラインアップが良いかを試すものであった。

アジア訪問試合で、すべてのピッチャーが登板できたのは良いことであった。



←現在行われている国内リーグ

スラッガーとしては、セペーダ、デスパイネ、アブレウ、ベル、グリエルがいる。バッティングは良かったが、多くの欠陥もあった。反省点は、守備で、得点とは関係のないミスがなくすこと。キューバのバッターは、事前に考えをもたないでバッティングに入っている。バッティングでは、単打であれ、長打をねらうのであれ、同じスイングをしている。これが、三振が多い原因だった。

ピッチングでは、ピッチャーにはいい選手もいるが、戦略的・戦術的な考え方が十分でない。

憂慮されるのは、バントが下手なことである。バントが少ないという問題ではなく、バントをするときに、一度もバントをしたことがない印象を与えている。走塁では、スピードをもっているが、進塁する意図がないという技術的欠陥がある。



アジアとメキシコの試合を分析すると、統計は、不要である。問題は、打率を上げること

と、投手陣が押さえることで、それが来年3月以降に必要なことである。

11月25日から第52回国内リーグが始まり、第3回ワールド・ベースボール・クラシックの代表が選ばれる。この国内リーグが、最後の準備となる。

第52回国内リーグの後に、ピークをもっていき、そこで勝負の試合を行う。国内シリーズをどう戦うかが、そのカギを握っている。

3月2日まで、まだ十分時間がある」。

さて、来年3月3日、キューバ・チームは、第一ラウンドでプールAの中でブラジル・チームと初戦を戦い、6日、福岡ドームで日本チームを対戦します。ビクトル・メーサ監督、ホルヘ・フエンテス、ヘッド・コーチが、どのようなチームを作ってくるか楽しみです。

(2012年12月16日 新藤通弘)